野人梅村之詩

特22
266

帝國圖書館藏

野人序

朝霧白き牧場にうたふ草刈歌、夕月ほの暗き棧路に聞ゆる馬子の唄、あるは海士山樵のうたふ調の、うの調ころ高からざれ、いづれ人生の苦を離れ、自然の美に打たるゝものにがあらざるべき、山巓の雲、孤村の雨、ひとり遊子が寂しき羇情をなぐさめ得るに至りては豈神韻の妙を傳ふるものにあらずや、野人橘村の詩は寧ろこれを希ふものなり。

辛丑清夏

羽澤の寓葡萄樹乃陰にて

橘村志るす

目次

夕の別れ夜乃迎へ……一
森の木小屋……一〇
海に珠あり……一三
白露光
其一、異象あり……一五
其二、失望す……二〇
其三、潜光を認む……二四
風……二八
野の人……三一
羊のぬし……三五
野葡萄……四〇
仙站……四五

野火……四九
野べの兒……五二
歌女の歎き……五六
松島歌
前……五九
後……六四
小管笠……六九

太陽の詩　一の卷

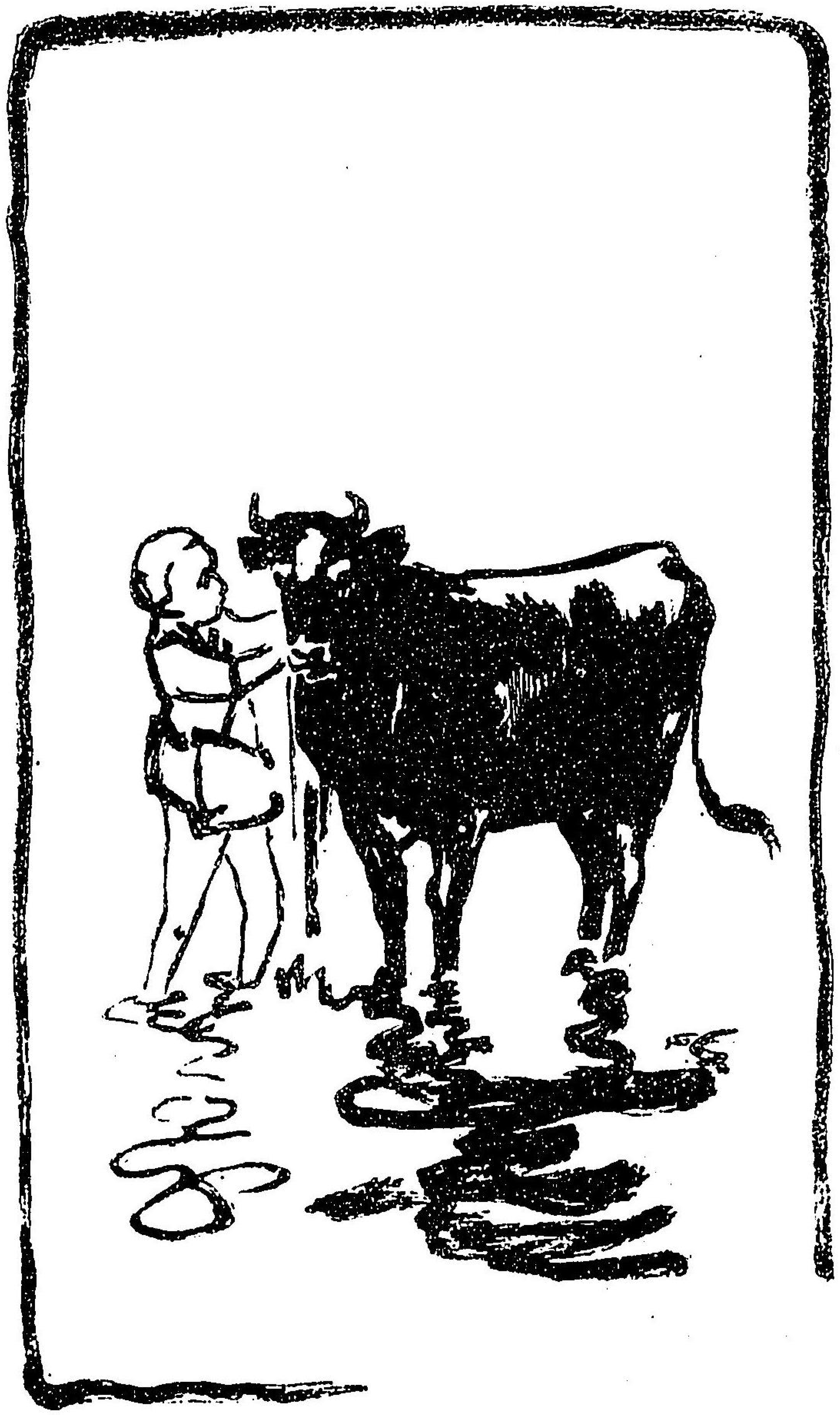
序金鞍白馬……七一
黄道十二宮　第壹節
一、地球―流星―月……七六
二、火星……八九
三、木星……九二

四、土星……九九
五、天王星……一〇三
六、海王星……一〇五
七、群星……一〇七
八、金星……一一四
九、水星……一一六
十、十二宮……一二〇
十緒の琴　第貳節
十一、太陽の宮のほとりにて……一二六
繪畫三葉……平福百穗氏

太陽の詩は完結せるものにあらず
本篇は其十が一のみ
續編は之を野人の第二集第三集に
漸次掲げんとす

著者　清水孝敦

東京豐多摩郡澁谷村
羽澤文庫內



野人

夕の別れ夜の迎へ

清水橘村著

荘厳なりし夏の日の
白き光も時たちて
紫金の彩の力なく
白日の終を世に示す
高き聖人のかくれ逝き

天國にかへる影としも
夕立つ、雲に眺めつゝ
一人綠の野にうれふ

自然のたくみ大機の
空に斷たれし叢雲や
うつりゆくかげ大いなる
夏の奇峰の立ずまひ
落日、履の下に踏み
今舞ひ昇るろのさまは
腕打ふり阿羅漢の
高くも笑ふ姿かな

またも燈火にくづをれて
人の終を泣まどふ
髮は亂るゝ未通女の
花の姿の白雲や
金鷄は北の空に飛び
旗は南に流れつゝ
影變りゆく夕暮の
天部の眺め慕はしき

古へ茂る夷草や
路なき山にわけ入りて
利劍打ふり日の皇子の
相模野わたり戰ひし

さまと見てころ、膝まづき
光をろがむ地心より
立ちし奇峰の頂に
あゝ白光よ長くかゝりたれ

終の床よ引れはふ
幕よ帳よ松原の
金鴉飛びかふ影黒み
夕の聲の野をわたり
靜かよせまる草の香や
深き韻の胸にしみ
心は消ゆれ幻に
靈は融けゆけ人の世か

耀きかへる夏の日の
名殘のかげを紅よ
もらす松原西の野や
眞葛花咲く薄原
東に闢く杉林
ましろき空の紫の
煙のうちに生れいで
三五乃月ぞまどかなる
樂しき園れ夜を招ぐ
風の音ない自ら
東地心に立つたりし

虹の一條白銀の
月の北方横ぎるは
奇峰の角ゆ空を射る
光に長く連なりて
山青き地の帶をせり
左千島の海に落ち
右臺島の山の雲
天心地心かけ渡す
虹の環は日の大神の
渡る碧空の橋やらむ
綠、紫、黄のいろゐ
七つに示す天文の

榮の世にはかしこけれ
天威滿ちたる夕暮の
夢より夜よさめいでゝ
照るべき空の月かげは
尊しや朝の霧をわけ
釋尊深山をいでたまひ
上求菩提の現はせる
光明いとゞ清ければ
聖衆も來り迎ふらん
白妙の衣あま津女れ
舞ひ飄す月光は

天人、人を夢やすき
玉の臺へ呼び玉ふ
夕影高み群山乃
霧にしぐるゝ蟬の聲
麓の寺の鐘鳴りて
遠の牧場よ牛吼ゆる

あゝ落日の弦を斷ち
久遠の淵に沈みゆく
終焉の野よ佇みて
秀でし人のかしこさを
かけ渡したる白虹の
天威依稀たる景に見て

神の藝術を戀ひ慕ふ
吾は野末よ小さけれ

哀しき光うすき影
殘照とみに消え果て
冥府よりつなぐ晝と夜の
淸き聲なる草の風
うするゝ一世醒むる世の
誓しを殘す日の光輝
これ一日の別離なり
人の子よ
靜かに祈れ來る夜を

喜びの色明きかげ
清光やがて渡るらむ
冥府よりつなぐ白日と夜の
清き聲なる虫の音や
一世は消えて一世また
生れもいづる夜の月
これ迎へなり一夜さの
人乃子よ
靜かに祈れ來る日を

森の木小屋

馬牽き來れ山里の
若き農夫よ蔭深き
丸木柱の森の家
一人のものと働かば
汝が米倉に量滿てむ

書もて來れ學舍の
若き青年よ市遠き
荒木造の森の小屋
一人のものと勵みなば
汝が身聖者につらならむ

里には秋の神祭
市よは廓花の宴

心を誘ふ友あらば
脚絆せよかし世路の旅
山よものぼれ海にも入れ

何をこの世の逆境か
悲しむ勿れ黄金なきを
森の木小屋に生ひ立ちて
あゝカーフキルド神ならず
万代ついに不朽乃名

何をわが世の薄命か
歎する勿れ田乃無きを
森の木小屋に生ひ立ちて

あゝリンコルン神ならず
身は天領れ民乃父

海に珠あり

海に珠あり寶あり
白水郎よ波濤に探れかし
玉探る舟の汝があたり
人守る神の靈あらむ

寶は草よ隱るなり
網もて探れ紀伊路潟
風雨恐れて海人乃子よ
宮を空しくする勿れ

路の難きに就かざれば
佳しき景は見ねざらむ
妙義は高し榛名山
雲渡る日の旅に知れかし

海に玉あり寶あり
白水郎よ巨水ま探れかし
塩路馴れたる汝が眼
もとより浪は見ねざらむ

眞珠松帆の浦に出ず
珊瑚高師の濱になし
ひろめる寶手に得んは

天父神授乃犬の能

路の難きにつかざれは
佳しき景は見ねざらむ
芙蓉は高し箱根山
雲渡る日の旅よ知れかし

白露光

一、異象あり

寂漠の日を梅の實の
暮るゝ小雨に落るごと
星は消ねゆく夜半の空

麻阿須や雲に流しけむ
血汐の紅葉曠りて
月の光を隠したり

授け玉ひし白き日の
神代乃春乃月影は
血汐の雲に汚れつゝ
消にも極てたる人の世に
幸ころおらず成にけり
照る日の祇のかくれてし
天の巌門を湧きいづる
氷の奔流も濁りでは

波の花咲く海原の
潮は淡し、沖つ藻な
へつ藻だに香ぞ無かりけれ
さては聳ゆる秀つ峰の
雪も塵の打交り
白く染めたる鶯のあと
落葉しがらむ谷にすら
きのふ蓮の葉の笠よ
置きわましたる朝露の
やどらむ苔乃草葉だになし
射るや白矢の白き日は

秋の葡萄乃實の如く
紅深く紫に
變れる晝のさまを見て
鳥も森よやひろみけむ
囀る聲ぞとだえたる

永久に蕩かぬ穹窿も
朧々となり果て
草葉さゆらぐ風もなく
ものゝ光も無に入れば
霞野川にたち立り
木の芽匂はむ春もなし

樂しき園乃後を絶え
沙丹が野邊となり行けば
黑き死の幕垂れこめて
雲捲く風乃狂ふがなかに
千羽の鴨や鷲鷹の
飛びかふかげの見ゆる哉

荒立洋の水も盡き
五百重乃山も崩れては
ろれの眺めに居ますある
姿崇ふとき佐保姫の
琴にひゞくと思はゆる
福音なにゝ聞くべけむ

二、失望す

朧月夜の春の空
星のやさしき煌めきは
花乃未通女の胸のうち
糸の光れ馳かよひしを
奇しや梅が香高き日は來ず
白き日影も照らさゞりき

里の鶏家の屋に
雨なき雲をつげわたる
天使の聲の散らぬまに
ひるを消し行く暮の鐘
ひゞく野末乃秋乃草

あゝ枯れたる月のいでたり

月姫の見む大瀛の
砥げる鏡まきり立ちて
船の鹽瀬も曇りたれ
沖べこぐ舟揖とりて
いづこの浦まかへさなん

雨風潮煙、海れ水れ
波は男ろ、樓の宴
夕女と袖まきし
枕が上れ綃屛風に
降り暮したる春の雨

自然の寵兒、夕まぐれ
寂寥き野べに佇みて
幾光雲よ望みては
さすが短かき人の世の
運命の風を袖に知り
心尾花の乱るらむ

黒雲暗きみ空より
降りろゝぎたる白雨に
正義は落る瀧津瀬のごと
只奔流の力するどき両舌に
名もなき道を説くとひふ

人士の袖ぞ華やかなる
きぬの衣もぬぎ捨てゝ
緑葉しげる木乃下に
睡りて夏の花籠の
胡蝶の夢よ遊びたる
稚子の昔にかへるとも
大龍神の野は消ねじ

野べの柳にたちたまふ
霞がくれの佐保姫の
歌も聞ねずなりし世に
今更おにを愕きて

人の子風に騒ぐらむ
世はたゞ異象ある夕ぐれどき

三、潜光を認む

杣人が斧も木に入らぬ
幽けき森乃杉の葉や
茂る叢にたづね入り
すゞしき星のかげ一つ
照らすも萬の深き
思ひ示ずを見出たふ
花に燿く夜半の月
光は残る山の井の

水底深く覗ひて
澄める情を知れよかし

枯れたる月に朽星の
奇しきは秋の紅葉の
夏れはしめに染まるとき

人乃心の火は燃ゑて
天心高くのぼる下に
匂ひもうすし日の光

春乃殘れる谷間の
苔路乃露の雫にも
有情の影はうつりつゝ

疎韻れちくる山乃端れ
しもと松原あらはれて
細楽のゆらぎ閑かなり

白き日かげは潮の
海人が白帆を照さねど
火山の底に石はとけ
硫黄ながるゝ淵ぞある
ほとりゝ人の行きたらば
何のみ神の戯れか
うれ白骨の醜男
打ては金黄ゝ焦れつゝ

毆けば色に啼く人の
聲ころ満つれ世の塵に
大龍神やいかるとも
すゞしきまゆ乃輝やける
吾に自然のゑまひあり

さりなさりとて茂る楽乃
杉の下枝の安らけき
鳥乃時にやどかりて
祈の歌をことわげむ
來ずや眼にくもりおき
男女はかみもこ乃めり

星は無花果の落るごと
月は紫陽草の色變り
てる日は葡萄の實の如く
み空沙丹れらび
我世こゝに碎けて
花桃の實を結ばぬとも
心、廣き樂園の
つゆ滋き夏の野の草

風

み空に刻む浮彫の
雲こゝろなく飛びはなれ
人に想を傷ましむるも

ともなふ風のあればなり

自然の文の糸綾の
薬はこゝろなく飜へり
秋ころ胸を騒がするも
ともなふ風乃あればなり

されば澄みたる香の通ふ
綠乃森乃夜の月の
烟れる影も八重に立ちて
雲のかくせる時もあれ

されば天地火のもゆる

樹立ぬ原乃紅の
夏の光も空に立ちて
砂のかくすときもあれ

あゝ鶯の羽を閉ぢ
花を草葉の根にさそふ
春の夕の風はかくまで
幼なき胸にやどりつゝ

または魔の吹く笛かぞと
暗き夜にきく木枯の
落ちて聲なきかげをかくまで
我は淋しくいだきたり

それ西風よ、こち風よ
風の白雨、浪は狂ひ
大山ずみも荒いでむ
風の姿ぞかぎりなき

遠く去りては近く吹く
朝夕乃その聲は
寂しからずや水鳥の
浮寢の夢の人の子よ

野の人

黎明草に滿ち

薔薇の花の朝
光、ひろごりたる
森の白き靄

清き空にふる
鈴の音きこゆ

阿論わした新禱終へて
野よかへり來か

いなろは知らず
谷川の水のせゝらぎ
石翠なるほとり

深き木かげの下

宮の階きざみ下り
生れし人の子ひとり

朝な朝な都にいでゝ
詩歌を說く

風雅なき子らは
たゞいでよ戸の前
金の冠きぬの衣
朝の光よまばゆく

黄に紫に紅
七色燿く見む

高く崇き姿
酔ふ子いくたり

黄金の羽翅
白銀の履にぬきかへ
雲こほる山の頂
秀める天部くだり

琴を弾ずるかしこき神
琴に調の歌をきけや

草の葉——鈴の音
袖の風——薔薇の花
　栄えある
　　野の七百万里

羊のぬし

蓮の花の白露に
ひらく音ころ東明の
光を呼ばふひゞきなれ
まだ夏の夜は山鳩の
和毛の胸ま殘れども
老ひし智人はさめにけれ

若き羊を引き連れて
野に逍遥よいでゝ來し
鳥の羽衣ながやかに
まとふは麻の白布か
袖よ入れたる詩の卷
角の小笛をとりそへて

ふまへる履に露はちり
小さき虫とぶ草のうら
蜘蛛のかけたる閾多く
しば〳〵立つや人の影
れはふ狹霧の樹を罩めて

風も渡らぬ静けさに

今ぞさしくる朝の日の
光のうちに聲ありて
人をば起せ世の子らが
生命のためよつむと云ふ
葡萄は園に番紅花の
香ある泉も湧きいでゝ

惠みある野ようまれれち
自づとすぎし翁ころ
さながら神のみ使乃
雲をふみゆくごとくなる

姿崇とみ満つ潮の
浪間に龍はをとるかな

見よ金色のいろふかく
天馬の雲まいなゝきて
青き下界の草を戀ふ
國にはひとり天地の
弦を動かす力ある
九十九の翁たゝずめり

今日のいのりの言の葉に
袖をふるへば霧きゐて
手をめぐらせば立まよふ

鼠のいろの雲崩れ
聲をあぐればみ神らが
射る時の矢も流れゆく

夏は更けゆく一ときよ
木の實梢にゐからみて
湖近き森かげの
あけび紫色もつき
葡萄は棚に味ふかく
柘榴は甘くみのりたり

白露かをる夏の野の
駒よのりては大空の

星のかずにも入るかいま

春のひな鳥音よおきて
木の間をくゞる歌のごと
雲よびたまふ角のたて笛

野葡萄

土すきかへし石を去り
肥ゑたる畑は苗植ゑて
好き實を結ぶ秋の日の
やがて來らん嬉しさよ
朝は謠ふ葡萄園
夕は去年の葡萄酒

嬉しからずや
　綠葉の
蔭に葡萄の
　染まるとき

たのしからずや
　紫の
葡萄の房の
　かゝるとき

狐入るかこ柵かまへ
畑よ望樓をしつらへて

好き實を結ぶ秋の日の
やがて來らん嬉しさに
朝はうたふ葡萄園
夕は去年のふだう酒

たゞ一とせの
收獲の
園の葡萄よ
實れかし

棚の横木も
たわますば
一人命の

緒も絶ねむ

落ちし床にも石を入れ
破れし衣もぬき捨て
よき實を結ぶ秋の日乃
やがて來らんうれしさに
朝は謡ふ葡萄園
夕は去年の葡萄酒

早も實のりて
色づけれ

闌れ葡萄の
濃紫

收獲も見ねて
利も見ねて
園乃稲荷の
棚たわゝ
實りまちつゝ謠ひつゝ
酒を飲みつゝ遊びつゝ
收獲の秋をまつ程ょ
風は來りて葉を落し
鳥は來りてついばめと
稲荷のよきはまだあらず

あゝ草刈らず虫とらず
あゝ棚結はず手を入れず
なるにまかして朝はたゞ
酒にうたひて夕はたゞ
歌にいねたる報酬とて
黒き野稲荷山稲荷

仙蛄

蟪蛄一名天螻一名仙蛄穴土而居有短翅四足雄者善鳴而飛雌者腹大羽小不善飛翔吸風食土喜就燈火

ふと夕暮の逍遥ょ
ものゝ寂しき聲を聞き
耳覆ひしは無心——

げにいと細き、鳴く聲の
風はもたへぬ趣きは
歌女がうたにやあるらむ

あゝそれはまた美はしき
聲に姿は穴にして
天蛄の鳴く音と人は知らじ

來ても見よかし草花に
いづれ香はなき思なき
歌女と天蛄乃姿こそや

春にうまるゝ花鳥や

夏のあしたの朝顔の
天蛄の命こそはかなげれ

神や授けし戯むれに
姿おかしく産れたる
歌女乃身こそ悲しけれ

戀の焔はさけぶ音も
空しくはかの名は消えて
ありとも知れぬ穴の天蛄

おなじ光に生くる身の
たかき賤しきけじめあれ

人のさだめは似たらずや
秀でし才も秋の野や
千種がうちにうづもれて
水に流れつゆくもあり

無才も峰の夏木立
飛鳥の時旅人の
やどりの蔭となるもあり

あげかずもあれせまき世に
深き差ぢめ才なき地の
草まがくれのろの天蛅よ

いつはりの名の音にひゞく
歌女か幸まくらぶれば
汝が領土の安けからずや

野火

牧場わたりか草やく
煙の影ひろごり
村、山しづかに融けて
黄昏いつか湧きぬ
雲に落ちたる夕日
名残なき無我の境

燃ゆる一つ乃火かげ
賤の燈火か星か

夕づゝまたゝくした
燈火畑にもる
紅深くなりぬ
山やけ野やけ今知る

彼處住む人なきか
この里宿りあるも
零ぶれこし旅人
我まかす情なし

野火山火誰がしわざ
よもし人乃家なくも
袖の露滋からず
草枕風なからむ

燃ねて消ねてもゆ
似たらずやわが思
故郷に君すてゝ
今も父たづぬる身

哀れ面影知らで
いづこに訪ぬべしや
かれ光かの火は

神の招きかいざや
ぬば玉の闇
野べ路なきも
いろがむ
天なる父乃――
まねきて告む
れとづれ――

野べの兒

雲の衣を引まとひ
女神がのれる白駒の
闇より空に入ると見て
目覺し兒ころ崇とけれ
搖籠の床をぬけいでゝ
駒の行ゑやたづぬらん
野に小蜂とぶ白薔薇の
蔭にぞ稚子は來りたる
殘んの星か白露の
胸に滿ちくる朝ばらけ
何とはなしに微笑める
目にうるはしき光あり

かゝれば草の重すらも
足のほとりに囀めぐり
茂れる森の巣をいでゝ
雛の山鳩谷に飛ぶ

樹立ぬ原に住むといふ
獅子も馴れくる人の子の
清き野唄の聲を聞き
惑かけり去る雲の前

青き香高き草を食む
村の牧場の小羊に

しばし化ししたる狼れ
形も今はかくれたり

流るゝ自然の眞清水を
稚子の惡魔に乞へばとて
火焔乃油唇の
花の蕾にろゝがむや

露にちる薔薇の花びらの
草より蝶にうまれつゝ
羽袖縫ひあふ野べの雛
兒はたはむるゝ夏の風

吹かれて輕く飜り
み空に入りし蝶のむれ
野には殘りぬ白あやの
衣のみ風よゆらぎつゝ

歌女の歎き

草葉もれくる白き日の
細き光もたゑがたく
白露こぼる淺茅生の
根よころふかくかくれたれ
根にころ深くかくれつゝ

姿は見せねいかにして
われを傷なふ人の子の
朝夕に來らるらむ

あした夕ま歎きても
歎きつきせぬ秋の夜の
哀れと見らむものもなく
涙に朽つる我身かな

涙に朽ちて土となる
薄き生の盲兒には
あゝ在と云ふ殖生れ
めぐみの露やかゝらざる

めぐみの露のかららずも
せめて無き名乃立さらば
胸のいたみもなからむに
天蛄の歌こそうらみなれ

天蛄の歌をやうらむべき
何を人乃子あやまりて
いざゝ拙なき虫乃身に
くるしむ名こそ負せたる

五逆乃罪や前の世に
重ねし佛のいましめか
七生五生こゝよまた

變らざる名の歌女われ

松島歌

前

巨水に浮ぶ
松島の
巖の日かげ乃
濃紫
松の翠緑も
朝日夜に
まだ被ぎたる
夜のきぬ

滿ちくる朝の
　潮の音よ
千島百島
　夢さめて
八重の海原
　ほの〲と
明ゆく彩ぞ
　けがれなき
花とよほひし
　あか星も
夢路に消ゑて

　月のみぞ
中空淡く
　かげ白く
高く小さく
　殘るなる
紅蓮花咲く
　朝日子れ
光漂ふ
　沖つ波
邊つ波雲の
　遠きにも
崇き韻は

耀やけれ
浪の穂(は)あかく
海燃ゑて
黄金とけ合ふ
眩曜(まばゆ)さに
うつる島影
松の影
黒く中は
別れたり
玉藻の馨(かをり)
かぐはしく

松れ葉渡る
朝風の
しづけき嶺(みね)の
雲といでゝ
鶴やみ空に
翔(かけ)りこむ
あしたの聲乃
松の風(かぜ)
朝(あした)乃いろ乃
島(しま)乃松
島と松との
浮(うか)びたる

松島の海(うみ)
たふとけれ

淺

み空(そら)むがぶす
わまの原
八重(やへ)のくまちの
わりろ海
浪連なれる
こゝはまた
もゆる火なかの
夕島や

雀椽深き
　夕雲の
かゆきかくゆく
　かげ見れば
島の八百島
　しまの松
空にうつると
　仰ふがるゝ
風の音なひ
　絶えはてゝ
波も音なき
　夕まぐれ

星の光も
　見ぞろめて
はや新月(にひづき)の
　さし乃ぼれ
浦の玉藻(たまも)や
　流れよる
百の島曲(しまわ)れ
　岩が根に
砕けてうつる
　松乃影
月白銀を
　ちりばめり

松の緑の
　薄烟(うすけぶり)
濤(なみ)れ白きも
　けぶりつゝ
渡(わた)るみ空乃
　月かげに
島の海(うみ)ころ
　うつくしき
月よ啼(な)きゆく
　鳥の音は
あま飛ぶ鶴(つる)の

蹤やらむ
濱の眞砂路
　あととめて
遊ぶは山と
　水の神
松のみどりや
　百島の
たくみの神の
　現はれて
夜ころ遊べ
　山水の
祇のめぐみの

れはいある哉

小菅笠

山れ朝立ち
夜の舟どまり
雨も降るなよ
日も照るな

○

旅のほころび
誰が手に縫はす
針に糸添へ
伴したい

○

月もれ傘を
ぬれめしたアへ
君もめしませ
れ十七を

○

馬を牽きませ
朝草刈の
行きは旅人
歸りや虫

○

ゆきはうつゝよ
棹さす渡し
もどりや流に
水鏡

太陽の詩

花、この靈光によりて咲き。葉、この靈光によりて茂り。人、この靈光によりて生く。絕大無限の自然美。何の思想、何の詞句を用ゐて之を謠はむ。さはれ吾太陽の詩は是を試みんとするものなり。

金鞍白馬

あした岷崙の谷をいで
夕べ芙蓉の峯にたつ
かげ万丈の白雲（はくうん）に
天使の金の光冠（かんむり）の
ひかりを雨になげかけし
虹のうき橋ふみわたり
かたちむなしき碧空（あをぞら）の
極みに吾はいたらんか

照る日の中を飛ぶ鷲の
廣き羽翼（つばさ）よ身をひろめ
百重の雲をおびけつゝ
星の世たかくかけりこむ

北斗はとはし霜の夜の
破軍のつるぎ見ねざれば
さまよふ雲に鳥は入り
魂もむおしくありよけり

棕櫚の葉にさす三日月の
光に獅子の吼るごと
みうら吹きこす風乃音よ
ねざろきさむる手枕や
いつか纓（の）りけむ白駒の
たてがみかゝやく金の鞍
衣（ころも）は藤の濃紫

桂の鞭を手にとりて
手づなかいくる雲の上
天馬の草を戀したふ
青き下界の影は消ね
ジョーブの神の放つはか
空に白光たかく立つ
光をさして翔り行く
駒のつばさ乃早ければ
跡もたゞぬ方里のみちも
秀白の百合の花の香め
夏ふかき野にはやうきそ
むかしトロオれ戰に

小手をかざして武士の
楯とも見ゆる金剛の
石門山に高くのぞむかな

太陽乃神殿めぐる十二宮
光りかゞやく殿ゐまは
薔薇(しやうび)まやどる蜂のごと
しげくぞこもる武士ら
雄々しき神も守りたまふ

七丈の劍ぬきもちて
しも夜越ねゆく磨蝎宮
寶瓶殿の森の夜に

うたげ開きしわがために
バッカス神の童子らが
ばらの番石榴手にさゝげ
いあんひがしの道を示す
いで朝風に打のりて
到らん天の八十蔭
太陽の宮

嘶く駒の行きまどへる
雲は遠くもかくれたり

黄道十二宮

一、地球——流星——月

柳にかけし佐保姫の
春の霞の衣白く
金糸みだるゝ日のゆふべ
花の冠がたむけて
冷人歌舞する宮ころは
たかります地の神の
雲むらさきの庭なれや

丹頂の鶴松に鳴く
御苑の夕べ立ちのぼる
白き雲は天津女が
不死の薬をやくやらむ

天の瓊矛（とほこ）のかゞやきは
海よりいでし秋の月
佩べる劒乃かゞやきは
月よりれちし秋の水
みむねにひゞく曲玉（まがたま）は
振鈴乃音か金環の
かぶとの星のかげさえて
紫帳よゐます身のかため
たとへば龍虎威をふるひ
獅子大象のいきほひや
帝釈修羅乃日月も [illegible]
手よてろとらむ大み神
[illegible]

宝のみあらか渡らせて
黄道光のほのかなる
み空の雲よ放ちけむ
白矢の征矢は春ふかき
星乃つぼねれ棟を射り
紅蓮くづるゝ八重垣や
霧をうかちて降り下る
雨は火の雨星の雨 [illegible]
流れ星とぞ人は云ふ [illegible]
[illegible]
圓生樹（えんじやうじゆ）香（か）のかをるなる
あやのとばりの奥ふかく
はべるは月乃姫皇女（ひめみこと）

二絃はすみて松に落つ
尾上の夕べ秋の風
四絃はかなし籠の中よ
ひなをこひ鳴く夜のつる
黄金の笛のたかき音は
秦嶺の雲を動かさむ
うれ金谷の鶯の
梅に囀る聲きけば
天女が歌ににたるかな

こは帳臺の夕まぐれ
神と姫とが酒もりの

花のむしろにかしづきて
童女の歌よ合せたる
よろこびの曲千代の曲

たまきの光花かざし
黄金の釧(くしろ)白百合や
月の姫神かざりたる
十二の色のうるはしく
汐のけぶりのほの白き
大わだつみれ濤に照り
あるは嶺のへ松れ上
あるは鬼すむ谷の氷

夜すがら空にゆきかひて
はらわゆ謡ふざれ歌乃
をかしき節をきけまかし
[illegible]
行きてとらへよ
[illegible]
秋の夜の
月に湧きくる
[illegible]
八は汐の
浪間は跳る
小兎を
[illegible]
一ひき二ひき
[illegible]
三ひき四ひき

長いれ耳を
打ちふりて
餅搗歌を
謡ふぞへ
たなゝし小舟
棹させば
夢か現か
白い畑よ
影が手まねぐ
よぶ聲が
友づなとりて

小うさぎが
月の千すぢの
白いとに
つなぎ止むと
見ゆるめり

袖よ玉ちる
浪は七尺
浪七は七尺
底は藍
藍の匂ひの
高うござる

高い浮名の
つらからば
沖に出さんせ
夕まぐれ
濱に手をとる
はなれ君

同じくはろれ
月かげに
あつき腕を
まかんより
袂ひたすが
ましろいの

出で丶遊べよ
夜乃うみ
波なみ打ち
小兎をどる
跳るのが
とんと面白い
可愛(かはゆ)い男
いとしい乙女
月のれ宮へ
きたあらば
三千歳の

桃をやろ

神のみ庭に春たけて
青葉いろます深みどり
下葉がくれにうるはしく
むすぶ果(み)は兒(こ)の幼きは
つむをぞまかし玉ひたる
そこに春あり乙女子の
戀する花は咲にほふ
そこに秋あり虫の音に
九十九の翁世をなげく
そこに人の子ふまへ行く
道ありしげる森のかげ

たてば衣よ吹きかよふ
神風胸にしみ入りて
思ひもいとゞ高からむ

柳にかけし佐保姫れ
春の霞の衣白く
金糸みだるゝみ光の
つゝめる園はしづかなり

葡萄の酒を造らんと
火帝の使神羽をのべて
行くは花ちる春の山
もゝ木匂はすみどり葉や

い乃ち與ふる草の種
双女の宮は棕櫚の葉よ
花咲く夏となりにけり

三、火星

椰子の葉かげに金毛の
獅子のむれゐる夏の宮
火星乃ゐら神つれ〴〵の
まひるの夢にさめしより
風ふきかよふ欄干に
禍のうた誦したまふ
君ます宮は十二城

衛士守る扉鐵の門
棕櫚の葉かげに金毛の
獅子のむれゐる夏の國

禍のうた誦したまひ
幸多くして安き世よ
異象あらはすあら神の
ちからのほどぞおそろしき

流るゝ水もとゞまらん
夢路の草もおどろかむ
それの小琴や市人の
うたも調も賑へば

空くれなゐの咸陽の
花の都の春をねたみ
火龍をよびて風たてゝ
人の子泣くをわざはらひ
盃とりし日もありき

狂焔はやもしづまりて
殘塔しろく霜みちぬ
月は傾くモスコーに
いろめきかゝる鷲の旗
將士なげくをわざ笑ひ
姫とかたりし夜もありき

見ようのおつき居は
ほのほはくかと紅ゐに
息吹いわうの氣も高く
血汐ながるゝ赤き顔ばせ
戴く冠に猛火もゆる

三、木星

さふらんの花さき匂ひ
鳥は囀づる椰かげ
薔薇の花にはみつ蜂の
こもりて蜜をしたゝらず
青き果のなる無花果樹の
林に來鳴く斑鳩の

袖にかゝやく燈火に
群はすゝしき朝の風
崖の葡萄のいろづきて
つばめは谷に低くとぶ
夜をや猿のむすびけむ
幹にまつはる葛かづら
すゝきふみわけ小を獐の
木の果をあさろ森の中
かろき裳裾をひるがへし
くゝのちの姫ねりぶおる

幹は苔むす木蓮の
つろの水に花落ちて

曉ぶかく生れしか
淸くも崇かきみすがたは
野の白百合の露を帶びて
日のみ光にたつごとく
谷なる洞乃奥より吹き起る
黑き風よは北の堪ねざらむ

夕三日月のかげはろき
岡の林よ設らへし
白木の宮の欄干の
しづかなる夜をうた歌ふ
――森よしらぶる

冬の琴

野にひきあせる
糸をたち
手にもつかをり
放たんに
白くも光れ
春の空

白くもひかる
春乃日の
姿かゞやく
ふり乃袖
摘みては入れし

[illegible]草花の
夢ならなくに
結ぶ實や

雛とぶ森の
若みどり
若き葉かげの
木々の果の
むだはみな落つ
夕まぐれ
夏乃風をや
あふぎなむ

夏の夕べの
潮(みづうみ)の
汀のおしの
みだるゝよ
秋の初風
たちうめて
果ころ黄金(こがね)に
いろづけれ

みのりし木々の
くだものゝ
一つ〳〵を
おつめては

謎よもれるを
　旅人よ
ひろがて探れ
　薬のしげみ
茂みの中の
　一つだに
乙女殘すな
　胸わつく
戀の焰の
　もゆるとき
ろゝがば露よ
　しづむべし

わゝかぐはしき
　木々の實の
高きかほりは
　朝なさな
霞とたちて
　靜かおる
宮の七重も
　めぐるらむ

四、十　星

錦糸の縫ひの美はしき
にしきの帶を三重にまく

みけしや襟のみかざりの
ふれて玉鳴るすゞ風に
さらりとかゝる黒髪の
千すぢは肩に亂れたり

そゞろ歩みにさしかざす
手馴れの風の扇にも
つゝみかねたる姿かな

こは埴安の姫にして
芙蓉の花の溶にけむ
白き泉乃流れより
生れいでたる乙女子乃

たゞ膽たけきよろはひに
誰れか知るべき亂れあふ
戰の塲は敵乃前
旗とりあぐる武士の
雄々しき心あらんとは

野は鳥山の虎はむれ
猛きを草になびかせて
世は八束ねの白弓の
引くにやさしき麻の弦
白羽の征矢を打つがへ
鏑の光流さむに
恐れてひろむものあれば

夕ぐれ森の風たちて
露ちるしたに立ちし時
高くもつるを挑ひなば
飄ころ雲より降るらむ

扇もつ手のしなやかに
柳の腰はほろけれど
紅(べに)をふくめる唇乃
み聲は雲に力あり

見よ傍らに待べれるも
白衣黒衣の人ならず
胸も金毛のたるゝ牛

毛は白かねのしろき象なり

五、天王星

廣きみ空を司どる
大王こゝまますといふ
宮も五百重のあやにしき
あかき瑪瑙の閾(みとの)まも
七つの雲をおりなして
硨磲(しやこ)の行桁瑠璃のやね
欄には眞珠ちりばめり
おつき朱房乃ひもかゝる
南の窓の玉手箱

箱れ中なる白雲や
黄雲あか雲うす雲の
朝な〳〵する大王が
みのりにあるは紅葉ちる
巴狹の谷の橋となり
夕べは野べの春風に
花れひかりをつゝむかな

高嶺をわたる風まくづれて
ひるがへり散るむら雲の
かげもかけろふ夕づく日
秋は流るゝ河水に
うつるは宮か太陽の

寒水ろろぐ谷の戸に
蟬の羽衣ぬぎすてむ
八月なかばあつき日の
紅ゐ燃る雲間には
火帝の錦旗ひるがへり
玉の車轗(くるま)かよふなる
春と冬とろ色たがひ
夏と秋とのいろたがふ
くしきは神のたくみなる哉

六、海王星

千珠滿珠の鏡よは

玉藻の糸をれぞしたり
佩ける劒のかざりには
海のたからをちりばめり
玉鳴る花のにぎたへの
袖には描く袞龍や
こんじの冠(かむり)頂ける
海王星のみことは
こゝよたちて
能力(ちから)をふるふ地の上
宮は寶瓶神の藏

先づ大空にかゝりたる
無弦の弓を手にとりて

引けば海原立騒ぎ
いさごをふらす疾き風に
黒雲をつく浪をあげ
水底ふかくひろみたる
大龍神はあれいでゝ
狂へどひるの常の日は
花鳥の像彫(ゑり)にたる
獨木(まるき)の舟の紋打つが
夕月乃ぼる沖つ浪
かへるしるしの火の山も
忘れて遠く響たく

七、群星

霜は葉乃なき林に茂げく
雪は木のなき山に深し
ふかき雪降る
しげき霜をのがれて
浪あをき海原よ
廣く翼うちばひ
日もあたゝかなる
沖の小人島を
れうふと空を翔る鶴の
千羽乃羽たゝききくかごとに
軍士の喚聲前よ聞きぬ
白き光は條(すぢ)をなして

空をななめに廣くきらめき
みどりの光も條(すぢ)をなして
うらを直にぞ高くきらめく
右よ左よ近く長く
青きひかりは白き光輝(ひかり)よ
しろき光輝は青きひかりよ
まじりてきらめき
きらめきわたる
軍士の鎧や楯を望みぬ

春の若葉のやわらかきに
花の百いろ色をはてる
野べによりくる蜂(すがる)ごとく

千軍万馬城にこもれり
あをく光る盃とよろひ
白くひかる楯と弓矢
ろれより放つ不断光は
晴れし神の日に
燦爛たり

勇力さづかるネルツの神
まへに敵なし軍士戰士

白百合花さく夏乃草に
白き羊のむれきて遊ぶ

野より岡より山を越ゑて
森の深きに駒をやれば
青葉乃風の袖に涼し
木かげの泉に水をかいて
駒を早ます
白羊宮のひがし
湧きづるも雲
落つるも雲乃
五百重まかゝる河の水
白くひろごる浪の狹霧
さぎりに別つ袖をまよふ
空の彦星ひきけん牛の
ふどき鼻綱の染分乃布

いろを見せたる
日乃み光

幾とせか經し雲の上に
いろ紫の衣はあせて
白銀の髪かたゝ亂る
あゝはてもなき空を翔り
天の十二をめぐる人れ
吾は命の永久をもてり

鷲鷹のもつ翼を添へし
天馬は不死の春の若駒

見ずや光ある鬣長く
ましましろき胸は春の山波
雪のあしたに望むごとく
眼のかゞやきはゆふべの星の
大洋の浪に洗はれいでゝ
秋空たかく照るかごとよ
風切るひろき二つの翼
大浪巖によせし如く
空をつき雲をつかむ力あり
蹄も厚く肩肥ゑたる
肉つき乃豊かなるは
處女が頰にたぐへてむか

八、金星

光りましろき百(もゝ)すぢの征矢
ひかりくれなゐ百(もゝ)條(すぢ)の獵矢
うすもの袖をなゝめ長く
蜘蛛の細糸風に飛ぶと
速(はや)く流れて雲に落ち行く

こは日の大がみ乃たくみ
風切る駒のひろき翼に
吹きなびくながき髯よ
繁くしげくたゝぬひまぞなき
たづなひかへて足がきを止め

しばしたゝずむ森よ眺めば
ゆらぐ梢の上に高く
太陽の宮は眉毛に見ゆあまれ
沈みて風の木の葉ならぬ
夕なぎの空
川より森に森より谷と
ひゞける木魂(こだま)

こは黄金わく山の洞の
巖うがちて工匠あまた
劔鑄るてふつちの音ぞ

げにや大王玉鳴る腰に
金わくところの鍵を帶ばす
鐵冠金笏白銀の履
万里の城は紫金まばゆし

九、水星

上は白浪月にくだけ
下は青波しづか夜ねむる
華冠ちりばむくれなゐ瑪瑙
さらに紫七色深く
藻の葉乃かざりながく垂れて
海の香放つ袖の風に
潮のけぶりぞ玉座めぐる

うろくづみ階のもとにつらなめ
朝なさなみ告をぞ聞く
かくて草に花に露をわたへ
露に香をこめ若き子られ
むねにろゝぎて春の心を

山路にかゝる
瀧のしら糸
袖ひぢて結ぶ月影
甕(もたひ)よくむや林薬の秋
夜もすがら飲酒(おんじゆ)する翁
ろの子まわつき

神のみめぐみ

芳はしき
黄菊しら菊のつゆ
むすべる花びら
花より落ちて
玉の雫のおのづからに
酒とわきぬる深山の谷の
巌の洞蔭年をへつ
雲にのる人
鶴を友とす
龍の侍臣のよばるゝ聲に

いは根の水のゆるぎ出て
かゞやく金壁星を流れ
人の世に雨とおりつゆとなり
雪やあられと降りて下る

ノアの方舟(はこぶね)浮ばせつるは
その水源こゝなりとかや
されば沙漠の夏の夕くれ
駱駝たふれて旅行く
人乃ながき
うらみを月に殘す
力をも神のもたせたれば
山をくづさむ技(わざ)もあらせり

十、十二宮

穹窿か深淵か混沌か
われ神のごと靈あるも
しばしはまどふ天球の
無象は別つ十二方
神秘の梁（うつばり）もたげしや
ゆるがぬ圜をめぐる星の
光の五彩かげのあや
金糸みだるゝ春の日の
陽炎野べをつゝみたる
一つの國は香ににほふ
梅乃花笠かたにかけ

鳥は來ておぐ磬きよく
夜渡る月の姫女皇（ひめみこと）
愛のひかりよ人乃子が
小琴の糸をかきならす
調べは高き地球なる

翼を西の風にのべ
夏の夕くれ沙漠行けば
獅子の吼ゆるを月よ聞かん
二つの國が冬の夜の
風を深山の谷に呼び
狂ふ焔を弄ぶ
神のみくらの火星なれ

駒の手綱を手よひかへ
下りて泉にたづねよる
林の奥のすゞしさは
袖にもあまる木々の實や
みのれる枝の葉をくぐり
鳥は囀へづる若みどり
若き女神のくゝのちの
袂を風よひるがへし
小鹿と遊ぶ三つの國は
かをりの高き木星よ

金絲銀糸のみだれ織り

色は七色虹をなす
錦の帶や玉の袖に
くびうなだれてなつみ來る
金牛群なす四つの國は
山うるはしく明朗なる
水巖が根よ逆立ちて
いかりやすらん山々の
峰のゐずまひ谷のかげ
あしたは霧に埴安の
見ねかくれする土の星

混沌たるは太古まゝの
嬰しき容をめぐりつゝ

風西隨時乃能力をうけて
みそらをまもり巡邏するは
夕べ越ゐきし第五の國
雲閣高き天王星

青海原や千尋の
深き秘密にしづめたる
寶瓶人にさぐらせず
沖を白浪高くなして
水を治むる海王星

畑にこぼるゝ芥子の實か
無量のかずの星を縫ひて

南をかけり北に遠く
行けば黃金の國を過ぎ
長城の紫金まばゆく
光さして
海のこなたは金波をどる
國は第九ゞ人の子に
命の水の井を與へ
草葉林れ木々乃葉に
白きあしたの露與ふ
水星劫初の流れあふれて
宏大たとへむものもなく
壯嚴とかむ言葉なき
不動乃海か深淵乃

緑れみ空聚かるよ
奇しき力は人をうつ
わが太陽れみ光は
十二方宮集まりし
こゝ圓寰のまなかなり

十編の琴

十一、太陽の宮のほとりにて

春は白羊宮　金牛宮
双女宮の花のあけぼ乃

夏は巨蟹宮　獅子宮
室女宮の緑葉のつゆ
秋は天秤宮　天蝎宮
磨蝎宮乃風きよき夜
冬は人馬宮　寶瓶宮
双魚宮の雪を履みて
金鞍白馬み空行かひ
雲れ美天乃美きはめぬ
ちさき地乃美の夕昏

欄干よ倚る人の子よ
さかんなる萬の光
星の自然知らずや

地に見るごと乃山高く
水青く花くれなゐなり

夏乃光をやどす青葉
茂きに鳥の群うつくし

かすみ白き花の峯の雲
つばさに蝶の逐ふ

秋の湖あさ霧消ねて
すゞしき風に白帆流る

草衣紫袖へだてもあれど
同じき慈眼の大日王

されど月桂定まるあり
無明の春の夢に入るあり

光芒たどへば錦衣ろよめき
綉裳のひるがへるごと

あゝ紅顔の子に示す
大幟(おほはた)のたかみかしこし

れはひなる蒼穹に一つ
けだかき國土うれよ地球

君のみこゝろ行なはるゝ
同じ夕づゝ赤き家よ

うのあたゝかき父母のかげ
幸を祈る燈火(ともしび)の前

歌のさびしき庶人(そじん)
翺翔とかける鳥と

致景をつくす錦の繪卷(ゑまき)
運ぶ歩みの船ま文よめ

有情の乙女戀になげき
詩人の夕哀涌せずや

神人まじり三春狩し
樵歌牧笛草安らなり

處や隱笠隱簑の後

飾ふはたゞ罪の子が額
むかし橄欖樹の下かげ
聖者が告げし天つ國
今十緒の琴をいだき
翼もつ子と歌ふ高き世のうた

かなでよ
黄金の琴
さがねの琴
かなでよ

かきならせ
高きねいろ
たかき音色
かきならせ

うたへよ
讃美の歌
さんびのうた
うたへよ

聲をあげよ
一きは高く

ひとときはたかく
こゑを上げよ

いましも
星の諸玉（みたま）ら
うるはしく若き光
あらはし玉はむ

羣（むれ）をひきゐる
小羊の
歸りゆくなる
鈴の音の
静かにひゞく

野の夕べ
夕もやかゝる
森の上に

いましも
星乃みこら
わかき光
あらはしたまはむ

白楊葉（やなぎば）ふるふ
そよ風に
そよげる岸の
さゞれなみ

めぐりて岡を
[illegible]流れゆく
河べみどり乃
　麥の穂に

今しも
星の諸王（みこ）ら
美はしく若きひかり
現はし玉へり

乙女はたどり
[illegible]男の子行く
野べの野薔薇の

花白く
[illegible]虫の翼が
[illegible]飛びめぐる[illegible]
[illegible]夕べの空の
[illegible]しづかなるは[illegible]

今しも
ほしのみこら
若き光
あらはし玉へり

かきならせ
黄金の琴

こがねのこと
かきならせ

狭く飛ぶ十の小指
糸をはらへ
とくはしる十の小指
調みだせ

いでその節よ息をいれよ
たかく吹けよ
けだかくすめる七つの節
しらべあげよ

風まくるへ
白銀の笛
しろがねの笛
風にくるへ

いましも
星のみひかり
紅うすく
かゞやきそめぬ

野べをつゝめる
夜がすみに
白露たりむ

夏の日の
鵠の木におく
西の山
鐘は静かに
鳴るわたり

いなしも
ほしのみ光
紫うすく
かゞやきそめぬ

黒きみけしの
神れりて

引き渡したる
山や野の
とばりは深し
夜のうらの
闇に描きし
花たまき

今しも
星のみ光
くれなゐ深く
てりかゞやけり

海鳥岩の

床に入り
松原くろく
夜はれちて
磯の波のみ
たゞ白く
沖か低き乃
浪ま湧き

いましも
はしのみひかり
紫ふかく
てりかゞやけり

うたへよ
しづかに
讃美の歌
うたへよ

ふけよ
音細く
銀の笛
ふけよ

調へよ
ひくゝ
黄金の琴

[illegible]しらべよ
心〻
星のみてらは
光れさめ
神秘の帳（とばり）
かゝげたまはむ
[illegible]
五雲の衣（ころも）を
　肩にかけ
[illegible]天使東に
[illegible]をびたまふ
[illegible]やみゆ朝の
[illegible]醱酒きて

海の潮の
　しらみろめ
輝やき渡る
　み光の
星はさやけき
　紅の
薔薇なす光
　オーロラの
袂にかげを
　かくしたり
無に入りて

あけぼのゝ
空の光の
宮ゐより
東光の姫に
先立て
車駕めぐらす
のみ神
十二宮殿に
かゞやかし
雲を七色
虹にそめ
山を紫に
いろどりて
やがてみ空に
東より西

野人　一ノ巻　終

明治三十四年十一月十四日印刷
明治三十四年十一月十八日發行

不許複製

著者　東京府豊多摩郡澁谷村　清水孝教
發行者　仙臺市大町四丁目十四番地　木村文助
全　仙臺市新傳馬町六番地　山本音四郎
全　仙臺市名掛町五番地　佐藤養治
全　仙臺市新傳馬町六番地　東北圖書出版舍
印刷者　仙臺市東一番丁八十二番地　菅野清伸
印刷所　仙臺市東壹番町八十二番地　菅野活版所

特別大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　仝　裏神保町　上田屋
仝　京橋區南傳馬町一丁目　目黒甚七
仝　日本橋區通三丁目　林平次郎
仝　仝　通一丁目　大倉書店
仝　仝　橘町一丁目　大草常章
仝　神田區雉子町　岡崎屋書店
仝　仝　美土代町　富田文陽堂
大坂市南區安堂寺四丁目　田中太右衛門
仝　東區備後町四丁目　吉岡平助
仝　仝　安土町四丁目　積善館本店
仝　仝　南本町心齋橋通り　金尾文淵堂
仝　仝　北久太郎町四丁目　岡本仙助
仝　心齋橋通順慶町北入東側　矢島誠進堂

[illegible]

全壹冊　全壹部定價六拾錢

[illegible]

發行所

仙臺市新傳馬町六番地　有千閣　電話（三百〇八番）

仙臺市名掛町　尚文館　電話略

特別大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　仝　仝神保町　上田屋
仝　京橋區南傳馬町一丁目　目黒甚七
仝　日本橋區通三丁目　林平次郎
仝　仝　通一丁目　大倉書店
仝　仝　橘町一丁目　大草常章
仝　神田區鍛冶町　岡崎屋書店
仝　仝　美土代町　富田文陽堂
大阪市南區安堂寺四丁目　田中太右衛門
仝　東區備後町四丁目　吉岡平助
仝　仝　安土町四丁目　積善館本店
仝　仝　南本町心斎橋通　金尾文淵堂
仝　仝　北久太郎町四丁目　岡本仙助
仝　心齋橋通順慶町北入東側　矢島誠進堂

仙臺地方裁判所長　能勢萬君題字
宮城縣仙臺市長　里見良顯君序文
菊田定郷君編纂

現行　公用文例類纂

全壹册

壹部定價六拾錢
郵稅一部金拾錢
紙數八百數十頁

本書ハ衆庶必要ノ公用文例ヲ戸籍、兵事、恩給、學事、圖書新聞紙、社寺、衛生、訟訴非訟、登記、特許登錄、土地、林野、鑛業、營業、警察、雜件等ノ十七類ニ分類シ併セテ現行ノ法令規則ヲ摘錄シテ其願屆手續及ビ參照條項ヲ明示シタルモノナレハ官ト民トニ論ナク座右寸時モ缺クベカラザレノ寶典タリ

發行所

仙臺市新傳馬町六番地
有千閣
電略（ヤマ）
電話（三百〇六番）

仙臺市名掛町
尚文館

（美文）青雨作（小説）

ほし草

近刊

天の一方に無名の星があつた。夜な〳〵其の小さい眼をあいて、しづかに下界の山や川や人の姿や戀の情や、ひとり眺めて樂んでゐると、下界には潮のほとりに、昔の友のゆかりれ『星草』淋しげに空を仰いでゐる不便さに、青い光の波のまに〳〵、聲なき言葉の舟を浮べて、そつと物語つた其のくさ〳〵。

近刊

目錄

ゆめ路
おけばの
面梶の記
朝きり
燈籠ながし
墓畔
潮上の吹雪
かたみがたり
天女像
つくも髪
蝴蝶の旅
この恨

發行所　仙臺市名掛町五番地　尚文館

入江祝衛著

日本俗語文論

全一冊　近刊

著者は多年、我俗語を數多の外國人に教授せるものにして其論ずる所、隨ひて斬新なり

本書は我俗語に行はるゝ文法を批評し若くは之れを説明すると同時に其美點を發揮し所謂缺點を辯護し加ふるに英獨佛等の言語と比較して論述せり

故に我俗語の眞價を知り若くは歐州語に對する其地位如何を知らんとするものは勿論、苟も言文の一致を論じ又は身を教育に委ぬるものは必らず一讀す可き書なり

發行所　仙臺市新傳馬町六番地　東北圖書出版舍

發賣元　仙臺市名掛町　佐藤書店
仙臺新傳馬町　有千閣

東北大演習 行幸唱歌 正價金貳錢 郵税十四枚迄金貳錢

松嶋圖誌 全一冊 正價金拾五錢 郵税金貳錢

東北大演習記事 正價金拾貳錢 郵税金貳錢

習育鐵道唱歌 一集 正價金四錢 二集 正價金五錢 郵税金貳錢

學校生徒用 繪具附用 筆洗 七色入壹個 正價金拾六錢 郵税金貳錢

繪具皿 斗り 七色入 正價金六錢 郵税金貳錢

增補仙臺案內 全一冊 特別金卅錢 郵税金六錢

生徒用時間表 ウルシヌリ一木製枚 金八錢 同 武力製 金八錢 郵税金貳錢

小學校生徒用 書見臺 壹個 金參錢

一御注文の際は必ず代價郵税共前金にて御送付有之度候　但し實際不便の地にて爲
替取組相成り難く候はゞ郵券代用一割増にても宜敷御座候
一小包郵便取扱所所在地よりの御注文に限り相互爲替取組の煩を相省き候爲め代金
有無之候も代金引換小包として御送付可申上候間荷着否や小包引換に代金其
被下候ても宜敷御座候
目の外內外各種の書籍澤山取揃へ置き候らへども萬一品切等の
寄格外廉價にて調進可仕候間何卒御注文仰付られ度候
爲替なれば（仙臺市名掛町郵便取組所）にて受取り得らる
郵便切手にて御送附の際は切手と切手の附着せざる樣其
はがき若くは返信料御封入被下度候
故に書籍目錄御入用の方は御申越次第送呈す

仙臺市新傳馬町六番地

有千閣書店

電略（ヤマ）
電話（三百〇六番）

…テ原著
…柴二譯述

…ント・ドロテヤ

洋装全一冊
渡邊審也氏畫
定價金廿五錢
郵税金四錢

…農があつた。父は素朴敬虔で、稍々東洋的の專制家、母は「仁…情深く操正しい婦人。その昔の大火事が縁で今の良人と一つ…か本篇の男主人公ヘルマンである。時しも彼の佛國大革命に當つ…けて、この地方にきた中に、ドロテヤといふ妙齢の處女があつた。温…俠勇、正義の徳を備へて、容姿は素より世の青年を魅するに足るほどあの…て、青春多血のヘルマンは全くその擒となつてしまつた。ついに此兩主人公は幾多の障碍を經て目出度伉儷を契るといふのが本篇の荒筋だ。以上の人物のほか、眞面目な牧師あり、滑稽な藥種屋あり、この二人がヘルマンとドロテヤの媒酌として活動してゐるから、面白いと受合と誰やらが保證してくれた。

發行所　仙臺市新傳…　東北圖書出版舍

草野柴二著

言文一致文集

洋装全一冊
定價金四拾錢
郵税金六錢
紙數四百餘頁

今後の日本文体は言文一致であるといふとは最早動かすべからざる議論で其わけも長らく讀賣新聞にも見へ其他にも諸大家の意見があつた。だから議論はこの位ひにして今からは其言文一致の實行に取かゝるのだ。其先鋒としては山田美妙子の次は堺枯川子のが各出版されて文例を示した。しかも彼等は文例として出たので稍簡單に失する嫌ひがあるやうに思ふ。この二家に次いで敢へて其欠を補ふといふほどの大望ではないが一は言文一致實行を一日も早くしたいため。一は稍や繁雜な事を書いて見やうと思つて著者は此本を出すとした。種類は手紙の文、日記の文、記事論説の文及び(羅馬文手紙の文)と雜文などを集めた

發行所　仙臺市新傳馬町六番地　東北圖書出版舍

初版賣切再版出來

土井晩翠著 曉鐘

菊判 全一冊
やまと綴 装本美麗
定價 金四拾錢
郵税 金四錢

是晩翠子が『天地有情』以後の作を編したるもの、今王陽明乃句に因りて題して『曉鐘』と曰ふ君の詩は世己に定評あり新詩國の建設未だ全からざる今日此書斯道に多少の貢献たるべきを信ず幸に江湖の清覧を乞ふ

發行元
仙臺市名掛丁五番地 佐藤書店
仙市新傳馬町六番地 有千閣書店

農學士
農藝化學士 今井秀之助先生著

増訂新編 三版 實地稲作改良論 全

洋装 菊判全一冊
正價 金參拾錢
郵税 金四錢

本書ハ實地家ヲ以テ稱セラル、今井先生ガ農事巡回教師トシテ實地ニ臨ミ其當業者ニ講授セル稲作改良ノ方法ヲ最モ平易ノ文章ヲ以テ編綴修補シタルモノニシテ通俗農書トシテ而カモ其處致ノ老實的確ナル恐ラク本書ノ右ニ出ヅルモノナシ本著ノ如キハ眞ニ斯業改良ニ志アルモノ、座右欠クベカラザル良書ナリ請フ當業者諸君陸續御購讀アランコヲ

發賣元
仙臺市新傳馬町六番地 東北圖書出版舍

仙臺市役所御藏版縮寫

仙臺市測量全圖

明治三十四年十一月出版

全 定價 金五錢 郵税 金貳錢

勳七等三輪秀春先生著

改正 宮城縣管內明細全圖

明治三十四年十一月出版

全 定價 金拾五錢 郵税 金貳錢

右二圖ハ實地測量至極明細ノ良地圖也

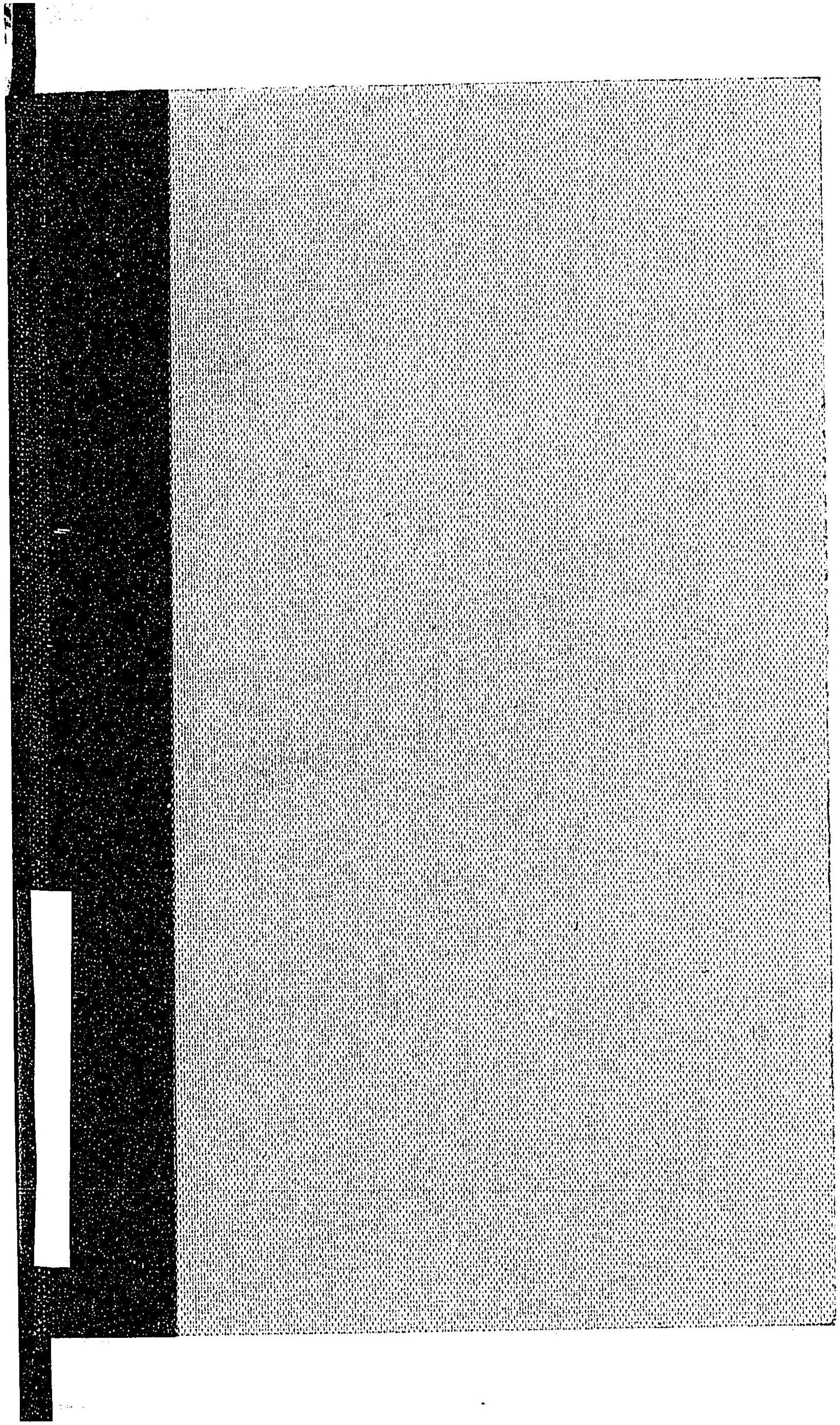
發行所 仙臺市新傳馬町 有千閣書店

東北 特別大演習記事

正價 金十二錢 郵税 金二錢 （百ページ以上）

本書は第二、第八師團各隊の小機動演習より順序大演習記事を細大無洩記載せし者なれば一目にして明瞭たる良書なり

發行所 仙臺市新傳馬町 有千閣書店



特22
266

野人

国立国会図書館

088122-000-8

特22-266

野人

清水　橘村／著

M34

DBG-0220